

IV スケープゴートの詩学へ

はじめに

過去十数年の間、何度も人の口に端にのぼり、はじめは納まりが悪くように見えたが、いまや定着しつつあることばに「スケープゴート」または「犠牲の黒山羊」ということばがある。このことば自身が旧約聖書のなかの記述に由来していることは誰でも知っていることだが、今日では、このことばによって表現される現象が、ユダヤ・キリスト教団を越える広い地域において、時代を越えて観察されることは否定できないであろう。

こうした現象は、ともすればあまりにも漠然とした概念で捉えられすぎるために、安易な一般論に終る怖れがないでもない。しかし、同時に、そう言い切ってしまうのにはあまりにも深刻な文化・歴史体験になって、われわれの意識のなかに定着してしまっているのである。

私自身も『歴史・祝祭・神話』（中公文庫）をはじめとして「ヴァルネラビリティについて」（『文化の詩学』I、第Ⅶ章）など一連の論考におい

てこの現象を取り上げ、それが文化のなかで占める意味について考えてきた。同時に、ここ五、六年の間、フランスをはじめとする人類学者を中心に、この現象に関心を寄せる人達と国際的な研究チームを作って、多角的に論じてきた。

一九七二年、『エスプリ』誌に発表した「日本における天皇制の神話Ⅱ演劇論的構造」には、当時さまざまな反応が示された。なかでも（基本的には天皇制および日本文化の集合的想像力のなかにおけるスケープゴートの論理を扱ったこの論考に）、当時『暴力と聖なるもの』を上梓したばかりのルネ・ジラルがすぐに著書を送って賛意を表してくれ、後に『世界のはじまりより匿されしことども』のなかでも私の『エスプリ』論文について触れることによって、彼の賛意が一時的なものでなかったことを示してくれた。

何度かこの現象について論じるうちに、私は、このスケープゴート現象こそ文化の根源的な活力を保証する仕掛けの一つであることを確信するに至った。たしかにスケープゴート現象による直接的被害者の立場はつねに深い同情に値するし、われわれはこうした現象のもたらす直接的被害を喰いとめる努力を絶えず行わなくてはならない。しかしながらこの現象には、道徳的レヴェルのみでは済まされない拡がりや奥行があり、それは人間経験の表層の部分（感情）のみでなく深層（想像力）にまで相互っている。個人の心理的レヴェルから、政治、風俗、精神史、美意識等々のさまざまな領野の動態的部分にまで、このスケープゴート現象はかかわっているのである。したがって、今日、改めてスケ-

プゴートを論じることは、文化の動的な側面がどのような根源的要素に由来しているか、を明らかにしようとする試みと重なることになる。

一 スケープゴート論の系譜

スケープゴート理論は決して目新しいものではない。しかし、今世紀の初期に提出されていたにもかかわらず、どういうわけか、この理論の展開に中心的な位置を占めるべき人類学そのもののなかで無視されつづけてきたのである。

ここで、この理論がどういう消長をたどってきたかという点について、いささか回顧的に振り返って検討してみよう。

スケープゴート理論を文化研究のうちに持ち込んだのは、今は文化人類学のなかで殆ど無視されているフレイザーである。J・G・フレイザーはふつう、『金枝篇』という古典の著者、『肘掛け椅子の人類学』の大家（つまりフィールド・ワークをしない人類学者）、文脈抜きの実事の無批判的羅列による比較宗教学の創始者等々といった、あまりありがたくない汚名を着せられて葬り去られた人類学者であった。しかし、今日、ある程度距離を置いてフレイザーの仕事を検討してみると、それは今日の象徴人類学の先駆的とも言えるべき体系であった、と読み変えることができるのである。

フレーザーの仕事の中心は、ふつう「神聖王権」と呼ばれる特殊の政治制度において、王の身体と同一視された世界ないし宇宙が、王殺しと呼ばれる交替のシステムによって、一大浄化作用を経て再生する、という理論を提出したところにあった。この考え方は、当時の西欧の知的世界に大きな衝撃をもたらした。王の衰弱・死と世界の再生は、世紀末から第一次世界大戦後に至るまでの西欧の主調音の一つであった（『西欧の没落』という主題に、合致するように思われたからである。『金枝篇』の知的衝撃がもっとも端的に現われたのは、T・S・エリオットの『荒地』であった）。

しかし、フレーザーの王殺しの主題は、三〇年代以後、荒唐無稽であるとして、植民地アフリカの調査に携わった人類学者達によって退けられることになった。フレーザーがターナーの絵画から刺激を受け、古代ローマ帝国のエトルスク王国期において老衰した王が、ネミ湖畔で若い挑戦者に敗れて殺されるという、パウサニウスの記述に始まる一連の古典のなかの記録を出発点とし、世界各地の民族誌のなかから探し出してきた対応例に基づいて提唱したこの「王殺し」理論を、人類学者達は一致して否定したのである。

しかし、今日、冷静に振り返って見ると、フレーザーはたんに王殺しの上にこだわっていたわけではないことがわかる。王は、何かもっと他のもののメタファー（暗喩的表現）の一つに過ぎなかったのである。つまり、フレーザーは、老いて病衰した王に代置され得るようなイメージを、民俗の儀礼のなかに探し求めたのである。その結果フレーザーが挙げたのは、特に収穫祭の民俗的儀礼において追

い廻されいたためつけられた挙句の果てに殺される動物や、こうした動物と同一視されて嘲笑の対象になる若者達についての事例や、カーニヴァルに際して放埒の限りをつくしたあとさまざまの形で追放される擬王の習俗等である。

この習俗の持つ意味を、フロイト派の精神分析学者のなかでも重視したのは、ハンガリー出身の民俗学者ゲザ・ローハイムであった。ローハイムはフロイト派らしく、民俗のなかにおけるリビドー発散の対象としてのスケープゴートを創り出すメカニズムについて、東欧をはじめとする諸文化の民俗のなかに豊富な事例を求めた。彼の仕事は今日でも、精神分析学を武器とした「民俗の読み方」として充分に刺激的である。特にわが国の民俗学研究が、社会学的方法に足をすくわれて民俗の深層に達する道を充分に見出せないでいる今日、精神分析的視点の導入の方法を示すものとして示唆的である。ローハイムが精神分析学の分野で継承したスケープゴートの理論は、意外にも、今日の記号論にもっとも強い影響を及ぼしているミハイル・バフチンのカーニヴァル理論において継承された。バフチンはその『ドストエフスキー論』（新谷敬三郎訳、冬樹社）や『フランソワ・ラブレールの作品と中世ルネッサンスの民衆文化』（川端香男里訳、せりか書房）のなかで、カーニヴァル文化が民衆の想像力のもっともダイナミックな回路であることを示した。バフチンはカーニヴァル文化の中心にあるのが「偽王の戴冠と王位剥奪」の遊戯であることを強調する。

西欧のカーニヴァルにおいては、毎年の祭りの期間に選ばれた王は好き勝手なことができるが、そ

の期間が終ると追放される。王にあたる張りぼての人形が造られることもあり、この人形は、祭りが終ると村の境界で壊されたり焼かれたりする。日本の民俗の「さねもりさま」や「どんど焼き」の習俗を想わせるこの西欧のカーニヴァルの儀礼は、価値の顛倒を含んでいるので、この期間には日常の世界で通用している通念は通用しなくなる。つまり、この期間に限り世界は混沌によって支配される。

こうしたバフチンのカーニヴァルの想像力は、今日、さまざまな分野の論者に深く広い影響力を与えている。しかし、このカーニヴァルの理論は前述したように、既にフレーザーによって『金枝篇』のなかで論じられている。フレーザーが王殺しの習俗について述べたことを、メタファーのレヴェルに置き換えてみると、カーニヴァルの民俗に、王が登場しないで動物や村人で代置される理由が明らかになる。つまりこの世の秩序の担い手としての王は、宇宙的秩序の担い手である。しかし人間の精神は同じ状態が永続できないように構築されている。同じ状態の継続は世界を停滞に導く。人間はそうした停滞を内的・精神的なものとは考えられない。むしろ外的世界を支える活力の減少と考える。場合によっては、それは病氣、不作、災害、犯罪の増大として自覚される。人間の生活に介入してくるこうした不確定な要素は、殆ど恒常的なものであるが、人間は強いて原因を求めようとする。すなわち生命の源である活力の担い手の減退がその一つの極とされ、その反対の極には不吉な力の所有者つまり混沌を導き入れる者の存在が考えられる。

線的な時間構造を前面に押し出した西欧社会を数少ない例外として、ミルチャ・エリアーデが数多

くの論考で示したように、多くの人間社会は時間を円環的な構造を持つものとして捉えてきた。そのなかでも多くは、大陰曆に従うか季節の推移に従い、一定期間を経ると時間は磨滅して、マイナスの力が蓄積される、それゆえ儀礼においてはじまりの力と殆ど暴力的に接触することによって、はじまりの輝きを取り戻す必要がある——と考えた。年毎の收穫祭においてカーニヴァルの行事を行い、前年の災いや穢れを特定の対象に担わせてこれを秩序の圏外に追放するのは、社会が自らの活力を定期的に回復するために不可欠の手段であり、フレーザーの提供した材料はそうした事実を雄弁に物語っている。それは今日の社会にも充分にあてはまることである。

例えば、定期的に行われる選挙は、本来は文字通り選ぶことを目的としたものであったが、選挙を包む興奮には不確定な未来つまり混沌が一時的にも導入され、それによって社会は蘇りの感情を喚び起される。人間は等質の時間が継起することに耐えられない。そうした時間構造は人間の意識に不活性(イナーティア)をもたらし、社会は一種のアノミー状態に陥る。こうして政治技術のうちにスケープゴート効果を組み入れる試みは、イデオロギーの基礎を越えて、人間経験の時間構造にかかわる問題として、われわれの前に立ち現われるのである。

ところで、学説史的な意味で人類学者はふつうフレーザーのことを忘れがちであるが、レヴィ・ストロースは例外的な一人である。例えば『神話体系』第一巻において、「宇宙論亀裂」という表現を用いて、西欧および東欧の民俗において年の暮れに村中の壊れた家具を持ち寄って村の中央広場で騒

音を発しながら焼くという習俗を、混沌を導き入れることによる時間の死と蘇りのための儀礼として紹介している。レヴィ・ストロースは、欧米における新年の到来の瞬間の歓喜、南回帰線を通過する船における赤道祭りのほか騒ぎのうちに、既に述べた民俗の反映を見ているのである。

オランダ出身で、現在イリノイ大学で教鞭をとるスイデウマは、『インカのセケ組織』というインカ帝国の社会組織の構造分析において、毎年九月の特定の日に帝国の中心から穢れを象徴する人物を使いとして境界外まで移動させる儀礼が行われたことを述べ、その儀礼と結びついた社会構造の分析を行っている。レヴィ・ストロースもまたBBC講演の「神話と論理」のなかで、やはり、ペルーのインカ文化において疾病が流行した際に三つ唇の人間が犠牲に供される習俗の持つ、スケープゴート現象としての側面に考察を加えている。

このような定期的な儀礼は、社会のなかの否定的なイメージを顕在化させることによって、時間の区切りをつけることに寄与する。つまり、多くの文化においては等質の時間の継起が一種の非活性化要素の原因であり、これを是正するために、堆積した否定的要素を定期的に顕在化する必要があると考えられた。これに対して不定期的に行われる儀礼は、社会が抱えている根本的ディレンマを解決する手段として使われてきた。

フレーザーは、どちらかと言うと、定期的・季節的に行われるスケープゴートの儀礼についての記述は行っていない。この点について、フレーザーのスケープゴート理論が日常生活に根をおろし、政

治構造の本質的部分を説明するモデルたり得ることを示したのは、アメリカの文学理論家にして哲学者でもあるケンネス・バークであった。

ケンネス・バークは、通常の住民が「範型」的生き方を求めるモデルとして、王権が機能したことを重視した。彼は、日常生活において、階層的秩序のうちに生きているという事実を出発点として、政治の秩序の頂点と底辺の対応問題を取り上げる。人は、自らが属する階層の上にある者を潜在的に憎悪し、下にある者にその感情を転化する。下位の人に転化することによって部分的には解決するが、満ち足りない思いが蓄積される。こうした不満は、解決の道が与えられないと暴力が無気力によって破滅的な方向をたどることになる。社会は、こうした負に向うエネルギーを頂点に向け、頂点にある者を儀礼的に破滅させることによってカタルシスの効果を得る、というディレンマ解決の方向を見出した。王殺しにまつわる神話・儀礼は、こうした解決の先行形態であった。

しかし、王権は底辺の存在に自らの運命を肩替りさせることになる。こうして二重のスケープゴートが産出される。すなわち、住民は王権の祀り棄てにおいて自らのディレンマを解決し、王権は底辺に犠牲を転化することによって自らのディレンマを解決する。

ケンネス・バークは、西欧社会においてユダヤ人が、知的には王とともに、社会的には底辺として二重にスケープゴートの性質を帯びていることを示した。こうしたユダヤ人の役割をもっとも効果的に利用したのがヒトラーのナチスであったことを、バークは『歴史への態度』という書物において

徹底的に論じている。

このようにしてバークは、フレーザーによって提出され、その後の人類学者が無視したスケープゴートの理論を象徴論的に捉えなおすことによって、今日、文化記号論が捉えようとする政治世界を構成する記号の階層的構造を明らかにしたのである。

スケープゴート理論は、社会心理学の次元では、最近物故したアレキサンダー・ミッチャーリッヒが『喪われた悲哀』（林峻一郎・馬場謙一訳、河出書房新社）で展開した。ミッチャーリッヒは『攻撃する人間』（竹内豊治訳、法政大学出版局）のなかで、「負の理想像」としてのスケープゴートについて、次のように論じている。

贖罪の山羊という烙印を押すことは、（攻撃の対象となる集団の——引用者）適応を不可能にすることなのであり、まさに適応が禁じられるのだ。ユダヤ人は黒人はあくまであるがままのかれらでなければならぬ。負の理想像の強迫がさかに行なわれる。じっさいにはそのときゲッターが、事実上ゆがめられた個性、「犠牲」を生産する。この犠牲者にとっては、状況を緩和するためには——むら気の昇華作用か残忍な直接行動による——攻撃的な反応しか残されていない。そして他方では、この反応が負の理想像を保持するために人種性格として図式化され、偏執狂的な不安をつのらせる。（同書、四七—四八頁）

負の理想像はある意味では正の理想像の倒立したものであり、ある個人や集団がアイデンティティ

を脅かされていると感じる際に、この脅かしていると考える部分を図式化するために用いられる像である。ナチスはユダヤ人に負の理想像を演出することによって大衆の「攻撃的な潜在力（ポテンシャル）」を最大限に引き出したわけである。

つまり、社会人類学者達がフレーザーを否定しているうちに、皮肉なことに同時代の歴史がスケープゴート論の正しさを証明してしまった。ヒトラーのナチス・ドイツが、アーリア民族の優越性を強調するための対のイメージとしてユダヤ人をスケープゴートに使い、スターリンが国内の経済政策の破綻から大衆の注意をそらしスターリン主義的独裁を遂行するために、トロツキストという政治的悪魔の像をデッチ上げた。つまりこの二人の独裁者は、日常生活の深部でひそかに働いていた〈排除〉の論理を公然と白日のもとにさらけ出し、かつては周期的に儀礼とか祝祭の名のもとに行われていたことを、時間の枠から外して日常的なテロリズムの手段に転化してしまったのである。

ところが、殆ど同時代的に進行していたこうした歴史的事実を説明する説得的な理論は、政治学からも社会学からも（特にわが国の場合）現われてこなかった。スケープゴート論はむしろ、精神分析および社会心理学において積極的に取り上げられてきたのである。

二 パラダイムの交換における〔排除〕の作用

私はこれまでも時々機会を得て、学説史におけるパラダイム交替にはスケープゴート狩りのような現象が起る、と論じてきた。つまり、人間は自他ともに認めるほど理知的な動物ではなく、最終的決定においては理づめの判断よりも恐怖心に基づく判断を行ってきた、ということをおうと努力してきた。人間は集団感情の外に放り出されたり取り残されたりすることを何よりも怖れる。スケープゴートにされるより、スケープゴートを選ぶ側をとるのは人間性の自然な状態と言える。一時代を風靡した学問理論が、最盛期において非のうち所のないようなものであるように見えるにもかかわらず、その一時期が過ぎると急速に色褪せたものに見えてくるという現象が、学説史上の交替期にはよく観察される。これは、人文系の科学だけではなく自然科学においても起り得ることを示したのが、『科学革命の構造』（中山茂訳、みすず書房）におけるトーマス・クーンのパラダイム理論であった。

つまり、科学者といえども今日的な理論と言われるものの側にとどまりたい。そのためにもっとも怖れるのは、過ぎ去りつつある古くさい理論的パターンの側にとどまっているという印象を自他ともに抱くことである。とどのつまり、過ぎ去ったと思われる理論を葬ることに力を借すのは、研究者自身であるという傾向すら見られる。

では、何故に、この新旧のパラダイム交替に研究者はかくも易々と組み入れられるのだろうか。それは、人間が自然や社会や人間についてつくり上げるモデルの「限界性」という点に帰着するかもしれない。人間の造るモデルにはどこかに時代的な限界がある。時間を経るに従ってモデルの枠組に収まり切らない現象が次々出現してくる。そもそもモデルを構成する概念が、一応の定義がなされてはいるものの、複雑な現象の説明のつかない部分を切り捨てて成立している、という事情は無視できないであろう。そのうちに、（暗喩のような多義的表現で言い表わされる）切り捨てられた部分相互の間の関係が次第に明らかになって、新しい概念が成立する。こうした概念が集まって自然現象や社会の現実についての、先行のそれとは異なるモデルが形造られていく。こうしたモデルは、主調音が先行のモデルと違うというだけの理由で、新鮮な輝きを帯びているように見做される傾向がある。十九世紀末のロマン主義的歴史学に対する二十世紀の実証主義の主調において、あるいは実存主義から構造主義へ、言語学における構造理論からチョムスキーの変形文法の理論へとといったパラダイムの移行の過程で、こうした力学は明瞭に観察された。

同じような現象は、既に述べたように、スケープゴート理論の根拠地の一つである人類学でも観察された。フレーザーの比較宗教学的方法是、「王殺し」の荒唐無稽さと「肘掛け椅子の人類学」という二つのキャッチフレーズのもとに葬り去られた。一九三〇年代以後、人類学においては植民地支配を背景とする写実主義と、現場体験を可能とする機能理論が支配的なパラダイムとなった。この時期

にフレーザー的と評されることは人類学者にとっては致命的であった。同時にフレーザーというレッテルを貼られないために、暗々裡にタブーとされるに至ったいくつかのテーマがあった。「王殺し」を連想するために避けられなくてはならないテーマとしては、「王権」がその一つであった。レヴィ・ストロースの出現以前は、「神話」すらも、どちらかと言えばタブー扱いにされるテーマであった。社会人類学の文化理論は、理論的に説明できる人間行動の、理論的と考えられる法・経済・家族・親族理論を中心に組み立てられるに至った。社会行為のなかで、法則性が明言され、予測性に基づく部分を中心に社会理論が打ち立てられた。こうした主知理論の枠組は、西欧社会がある程度楽天的、ある程度自己偽瞞的に作り上げた自画像の機械的な延長にすぎなかった。フレーザー自身もそうした主知理論を準備した一人であったが、その彼が学説史の上での最大の理論的スケープゴート扱いを受けることになったというのは、考えて見ればはなはだ皮肉な光景であった。

現地調査抜きのために、人類学的素材を扱いながら否定の対象となったという点では、フロイト、エリアーデ、そして今日『暴力と聖なるもの』によってスケープゴート理論のもっとも精神的な推進者であるルネ・ジラール自身も含まれる——ということ自体、まことに奇異な光景と言わざるを得ない。ちなみに過去十年間、レヴィ・ストロースに較べると、ルネ・ジラールを引用した人類学者の数はきわめて少ない。フランスにおいては、私の知る限りでは多分レヴィ・ストロース百に対して二くらいの比率である。私が個人的に面識のある若い世代の人類学者は、ルネ・ジラールという名前から

発する汚染を怖れるかの如く避けるか、この人に対して否定的な言辭を弄する。つまり、「スケープゴート」という概念とともに、ルネ・ジラルの人名はフランスの人類学においては依然としてタブーなのである。一方、『清浄と危険』（邦題『汚穢と禁忌』）において、一種のスケープゴート理論をこの用語を使わずに展開したメアリ・ダグラスは大歓迎されている。メアリ・ダグラスは現地調査によるモノグラフという免罪符を先に入手してからこの理論を展開し、フレーザーの『金枝篇』の新版の序文すら書いている。この事実をもってしても、理論的・客観的基準に基づいているように見える専門家の判断というものが、実際にはいかなるものか読みとれよう。

さて、機能理論は社会的現実の表層部分つまり意識される部分を読み解くのに精巧な装置をつくり上げたが、裏目読み、つまり（表層を生成する）深層の現実を読む装置をまるで持っていなかった。そのためレヴィ・ストロースの構造理論の出現とともに、認識論的レヴェルで新しいスケープゴートの対象とされるに至った。そして構造理論すらも、フランスの知的世界を中心に、『構造主義』という何でも持ち込もうとした体系の巻き添えを喰って、祀り棄てられようとしている。

こういう現象を見ると、かつて思想の流行についてカンドウ神父が言いはじめたと思われる（服飾モードに似た流行感覚）どころか、民俗学者宮田登氏が説く江戸時代の〈流行神〉の現象を想い起してしまうのは、独り筆者のみであろうか。

宮田登氏によると、〈流行神〉は御霊信仰にも似て突如として現われて当世を風靡し、ある期間が過

ぎると消え去るという神格に対する信仰である。そういう流行神が現われると抵抗するのは難しい。その理由は、多分、流行神が新しい時間感覚の組織の媒体である、という事情に由来するのではないかと思われる。それは、学問の世界において新しいパラダイムに基づく学説の果たす役割りに、似ていないこともないかもしれない。多分そのうちに「フォークロア(民俗現象)としての科学」といった研究が現われるに違いないと思わせるくらい、科学および思想のパラダイムの消長は流行神の祀り上げと祀り棄ての構造を想わせるところがある。そういった意味で、陽の当る場所における学問研究は〈パーフォーマンス(演技)性〉を帯びていると言える。

しかしながら、こうした現象も通時に眺めるならば、それは、〈新しい時間Ⅱ世界(善)〉と〈古い時間Ⅰ世界(悪)〉といった民俗的時間・空間を規定する感覚と、それほど隔っていないことがわかる。

科学的思考すら、世界を捉えるもろもろの思考形態をスケープゴート化して確立された体系にすぎない、とジラールは述べているのである(『スケープゴート』パリ、一九八一年)。

三 スケープゴートの挑発性

社会心理学の小集団の理論の分野で、フレイザーの主題を取り上げた一人がフィリップ・スレーターである。スレーターは『小宇宙——諸集団における構造的・心理的・宗教的発達』(一九六六年、ニュ

「ヨーク」で、王殺しに併行するような現象が小集団のなかでリーダー（集団）の力（マナ）を強化し、これを象徴的に引きずり降ろすか抹殺することによって、成員が彼の力にあやかり自らのアイデンティティを強化しようとする仕組みについて、徹底的に論じた。さらにスレーターは、現代社会における犯罪人の処刑および処罰の方法が、王殺しによって王の力にあやかるとフレイザーが説明した慣習に似ていることを指摘している。

深層心理学の分野で攻撃性の問題を論じた研究は多いが、なかでもスケープゴート理論を射程に収めた書物の一つに、アンソニー・ストーリーの行動学Ⅱ心理学的分析がある。

ストーリーは攻撃性を必ずしも否定的な形だけで捉えない。鶏のペッキング・オーダーについて論じながら、ストーリーは、攻撃性にある種の形態を与える、つまり「優劣原則にもとづいた安定社会を創造する」という機能」（高橋哲郎訳『人間の攻撃心』晶文社、五四頁）の働きを認めている。この点ではストーリーの立場はケネス・バークの象徴的階層論に似ている。ただバークの理論が主として集団内の構造を考察の対象とするのに対して、ストーリーは同じ攻撃性が外に向う場合に集団内の潜在的相剋は克服されるとして、次のように説く。

外的脅威の第二のそしてもっとも興味ある結果は、平時において人々の間を分けへだてていた障壁が消滅する傾向があるということである。（前掲書、五五頁）

ストーリーはまた、外的な要因による危機感が集団内の親和性を高める結果、アメリカ社会ではしばし

ば集団が乱交を愉しむ状態にまで至ると述べている。ミロツシュ・フォアマンが『パパちよつとずれる(テークング・オフ)』という映画で描いたのが、失踪した子供達の親の集いのこうした状態であった。

とは言え、このユートピア的親和性が問題なのである。ストーリーは、人々の連合が緊密な同一性に基づいている場合には分裂が必ず起る、という事実も指摘している。というのは、他の人々との同一化は強度の依存関係を前提として成立しているからである。つまり、一人の人間が自分のアイデンティティを外的な部分と内的部分に分け、外的部分の演技によって他の人間のアイデンティティが己れの中に浸透してくるのを防ごうとする場合、つきあいの上の交渉・やりとりを遊戯的に愉しみながら、自分のアイデンティティの固有の部分を守ることが出来る。しかし、(ストーリーによれば)緊密な同一化に基づく分裂には必ず、攻撃心がつきまといっている。こうした状態にある集団内において、「明瞭な分岐はどんなものでも、彼の内的安定には脅威になり、攻撃心を産む」。こうした攻撃心は次のような形でスケープゴートへ集中化される。

……正統派が自分たちに賛成しないものに課した残酷な刑罰は、彼らの信仰の強さの証明ではなく、その弱さを証明する。正統派の異端者に向う刑罰的攻撃心は、もちろん事の半面ではない。異端者自身は正統派たちから自分を分離させる自己主張タイプの攻撃心を、そのグループに對して示している。(同書、九二頁)

この説明は、宗教改革者内部の肅清から、近くは日本赤軍派の陥った筈に至る政治集団の非寛容の問題を解いている。しかし同時に、この説明もまた事の半面しか説明していない。というのは、スケープゴートの存在を必要とするのは、人間のアイデンティティの必須の前提条件でもあるからである。であるから同一化は、その対象が個人であれ集団であれ、内在するスケープゴートを必要とする本質の一次的治療法でしかない。ただこうした個人に内在する攻撃性の必要については、弱者攻撃との関連において、ストーリーによって次のように説かれる。

……すでに負けた者たちとか、自分たちより明らかに弱い者たちを迫害する傾向は、攻撃者自身に過去の恥辱に対して復讐する欲求があるということによって、初めて説明できるのである。

(同書、九三頁)

この場合、過去の恥辱とは、個人のアイデンティティを脅かす外在的脅威のようなものである。個人は、こうした脅威と自らのアイデンティティの関係を明確にしなければならない。アイデンティティの確立のために脅威は必要であるが、脅威そのものは視角的に外在化させなければならない。弱者はこの場合、格好の餌になる。こうした現象をストーリーは「妄想的投射」と呼び、次のような説明を加える。

妄想的投射の受容者となり、敵意と輕蔑の念をもってとり扱われる小集団を、多くの文化が保ち続けるということ、そしてたぶんそれらを必要とするということもまた明らかなことである。

インドの不触賤民……は、汚れて汚染の危険ありと考えられた人間集団の例である。(同書、一四七頁)

ここで問題になっているのは、弱者・少数者が必ずしも文字通りの弱者と考えられない点である。ストーリーは「いけにえとなる少数者が現実には弱いのに、潜在的に強力だとみなされる矛盾」を「不寛容」ということばによって説明している。たしかに、そうした側面は否定できない。だが、同時に「弱者」は多くの場合、潜在的挑発性を、本人が意識するとしないとにかかわらず備えている。「不寛容」による攻撃とは、そうした挑発性に対する痙攣にも似た反応であると言える。ただしストーリーは、少し後に「贖罪の野羊(スケープゴート)は強さと弱さを同時に体現している。われわれは第一の属性を彼らに投射し、第二の特質に同一化する。勝利者と敗北者はこのようにして他の動物にみられる、支配をめぐる攻撃的闘争の程度をはるかに越えた、相互憎悪の紐帯によって結びつけられるようになる」と述べている。

「強さ」というのは、「挑発力」に裏打ちされた他者の像(負の理想像)なのである。この「挑発」する力とは、宗教学が「ヌーメン」ということばを使って説明してきたものにほかならない。

四 エントロピーとスケープゴート

ではスケープゴートのこうした挑発性はどういう要素に由来しているのだろうか。それはスケープゴートの帯びている負性のイメージ、言い換えればエントロピー的要素によってである。言うまでもなくエントロピーはエネルギー(活力)を非活性化する。

エントロピーという概念は本来自然科学の用語であるが、暗喩的に社会・文化の領域に使われる時にいっそう大きな効力を発揮する。人間社会は、文化および個人のアイデンティティまたは秩序を構築するために、非恒常的な、そして予測不可能な要素を排除する傾向がある。そうした排除された部分は、しかしながら決して受身のままでとどまることはない。なぜならば、人間はバイオリズムに従って生きているから、固定的な状態がある一定期間以上存続することに耐えることができない。人間が周りに起っていることを理解するのに使う概念やことばは、たしかに、一方では定義を不明確にする部分を排除することによって出来上っている。排除された要素がエントロピーつまり負の項として作用するのはそこまでである。人間のつくり上げた秩序とか制度とか概念といったものは、固定した状態で続けると、そうした枠組からはみ出す要素が増大するように思われてくる。人間は変化を求める動物である。変化とは、以前には無かった要素が新しくつけ加わることである。新しくつけ加わる要素とは、実は、制度や概念が確立するために排除された負の要素なのである。人間が限定し定義した要素は、一元的な極と多元的な極という二つの極性を帯びている。一元的な極とは、法律のことばのように厳密な定義に従う極である。それに対して多元的な極とは、流行のことばのように本来の定義

はどこかに残しているが、新しい異質の要素を可能な限り盛り込んだ極である。つまり、文化はそれが公的に排除したものにひそかに依拠していると言うことができるのである。

あえて言うならば、スケープゴートの挑発性は、文化の大多数を占める集団が、公的には排除するものに、ひそかに依拠しているという事実によって説明することができる。

私が一九六三年から六八年にかけて調査した西アフリカのジュクン族は、そうした女性の挑発性を語っている。この社会では、男Ⅱ右／女Ⅱ左という対立項によって文化の枢要な部分が説明される。

私は、一九八二年十月、ニューヨーク大学人類学科における講演「二つの社会における女性の宇宙論的地位」で、この二元論の故に、女性は儀礼・宗教および象徴過程から体系的に排除されることを明らかにした。この排除の正当性を示すために、女性が潜在的に魔女であることが神話および邪術信仰において強調される。だから政治的・エラルキの頂点に男性原理を具現する王が置かれているとすれば、そのイデオロギー的対極に（神話のなかの最初の王の母である）魔女が対置される。ところが、このように体系的に女性を穢れた存在として排除した挙句に、この文化では三年に一度、王権の蘇りの儀礼を、女性の穢れの源たる月経小屋であった場所で行う。こうすることによって王は、ひそかにその宇宙的な活力を給されて蘇ると考えられた。このように、ジュクン族では「性の差」を強調する時、それは実は女性の力へのひそかな怖れの感情の表明であったと言えるのである。

ここ五、六年、人類学においては「性差」(ジェンダー)の問題がしきりに論じられるようになった。

はじめのうちは、いわゆる社会問題として「性差」とか「性差別」が論じられることが多かったが、そのなかから、「性差」の問題をもっと深く抉ろうという提唱がなされるに至った。特にミシガン大のシャリー・オートナーが展開した、「文化」対「自然」の問題としての女性という視点は、論議を呼んだ。それによると、多くの文化において、意識的にせよ無意識的にせよ「文化」に對置される「自然」概念が存在する。「文化」は「ウチ」の秩序へ、「自然」は「ソト」の混沌へ回復する傾向があると考えられる。女性が多くの社会で差別の対象になるのは、彼女らが「自然」に近いと考えられるからである。生物学的条件において、心理において、またシャーマンの霊能力を発揮するという点で、女性は、男性を中心としてつくり上げられた「文化」の規範には収まり切らない部分を保っている。この分だけ女性は「文化」から「自然」へはみ出していく。つまり「ウチ」にいながらにして高い異人性を獲得していく。そこで、こうした女性の位置をシャリー・オートナーは女性の仲介的位置と呼び、その仲介的な位置ゆえに女性は多くの社会で差別の対象になってきたと説く。「自然が文化に対してそうであるように女性も男性に対して自然であるか」M・Z・ロサルド編『女性・文化・社会』スタンフォード、一九七四年。

オートナーはもともとレヴィ・ストロースの「文化／自然」モデルに依拠しており、この理論が構造論的響きを帯びているのは当然である。「性差」の問題には、一方では二元的対立の頹廢した形態も含まれているが、それが文化記号論的方向を指し示していることはたしかである。なぜならば文化／自然、ウチ／ソト、秩序（情報）／混沌（エントロピー）といった対立概念において文化を捉えなおす

ことこそ、文化記号学が絶えず出発しなおすべき初発の地点だからである。そこでオートナー風には「仲介」的と言われる女性の立場は、フランスの記号学者ジュリア・クリステヴァの言う「おぞましきもの」になる。クリステヴァによれば、広い意味での〈文化〉のなかには論理的整合性に向う部分（ル・サンボリックⅡ象徴作用）と、その彼方に向う部分（ル・セミオティックⅡ原記号作用）がある。狭い意味での〈文化〉の枠内にはまり切らないものは、女性であれフリークスであれユダヤ人であれ、文化のなかでは排除の対象になる。文化のアイデンティティは、ある意味ではこういう形で現われる記号的過剰性を排除することによって成り立っていると言えよう。

ここでわれわれにとっての関心事は、多くの文化で〈ウチ〉なる差異性の担い手として差別の対象となるのは、こうした記号的過剰性を帯びた挑発的存在であるという事実である。過剰性は差異持込みの最初の標的になる。共同性のアイデンティティを保証するのは異質な分子の存在と、それらの分子が共同体の与える利益のすべてに与っているわけがない、という思いである。ただし、これまで何度も強調してきたように、スケープゴートと共同体はきわめて緊密な共犯関係を構成している。共同体はスケープゴートをその存続のために必要とし、スケープゴートはその過剰性によって共同体を挑発しつづける。人道主義的観点をさておいて言えば、スケープゴートが真の輝きを帯びるのは、挑発の結果、共同体によって迫害される瞬間においてなのである。

五 デジタル思考と排除の原理

レヴィ・ストロースをはじめとする構造論が表面化させた理論のうち、今後も確かな立場を確保しつつづけると思われるものの一つは、人間の思考は深層の部分において二元的対立を経過せずにはいないという論点である。こうした対立が、構造として比較的観察されやすい形で形づくられている社会が少なからぬ数、存在することは、世界各地で調査した人類学者の報告で次第に明らかになっている。

こういった社会においては、天／地、火／水、高／低、東／西、右／左、男／女、自己の妻を与えらる集団／妻を受けとる集団といった枠組で、世界の基本的な部分が説明される場合が多い。こうした社会では前者の項が優遇される傾向が無いでもない。したがって二項対立を基礎におく世界においては、潜在的に排除の主題が含まれている怖れがある。私の調査した東インドネシアのフローレス島のリオ族には、こうした傾向が見られた。しかしながら、この社会において、社会の全体性を説明するモデルとして〈母〉というゲシュタルト的像が、儀礼・家屋の上に反映され、女性差別に向う芽は紡ぎとられている。これに対して多くのアフリカ社会では、男女の対立、男性による儀礼・政治過程における女性の排除、が社会構成の基底に据えられていることが多い。そういった主調とない混ぜに成立

している二元的な対立が、女性の社会・文化現象からの排除という形に行きつくことは目に見えてい
る。

ここ十年のあいだに、コンピュータが普及したためか、デジタルとアナログという二つの論理構築
の型の対比が一般的に使われるようになってきた。デジタルとは言うまでもなく、10の累積による
システムの構築法である。電子工学の発達によって、デジタルの処理システムはきわめて複雑な構築
物となったように見える。

しかし、デジタル思考は、その根底的な部分において10という人為的な選択に基づいているとい
う、差異を持ち込むことによる長所と弱点を持っている。構造理論が文化の基底に据えようとした二
項対立は、ある意味ではこの分類に基づくもので、デジタルなものと、思考の基礎を共有していると
言えるかもしれない。

事実、渡辺弘氏はA—D変換という表現でデジタル思考の成立を説明している。氏によれば、こと
ばは、アナログ(情動的パターン認識)をデジタル的に「区別」し、名づけるというところからはじま
ったと言う(渡辺弘『デジタル思考とアナログ思考』カップ・ブックス、光文社、六〇頁)。

人間が大自然のなかにとけ込んで生活しているときには、「なにかもがアナログ的だった」と渡
辺氏は言う。ことばの働きはあるものを名ざし、名ざされたものとそれ以外のものとを区別し、それ
以外のすべてのものの区別を消し去ってしまうところにあった。区別されたものは情報になり伝達の

対象になる。

私が一九六〇年代に調査した西アフリカ・ナイジェリアのジュクン族においては、文化のなかの重要な範疇は「右手」と「左手」の対比において考えられる。事実、右手は男の手、左手は女の手として意識され、「右手」の優越が説かれるから、この二分法の行きつくところは、女性の不浄との結びつきであって、ジュクン族の文化は女性の排除の原則を貫徹させる。しかしながら渡辺氏によれば、「右と左に二分して、ものを考えること自体がデジタル思考なのであった」ということになる。人体のイメージは右と左の不均衡（アシメトリー）を前提とし構成される。だから、「人体はデジタルの原点であった」ということになる。

ところが、デジタル思考は、渡辺氏によると、広義と狭義の二方向に進む。狭義のデジタル思考は「ものごとを抽象化し、概念化し、そのうえで数量化する論理的思考に展開していく」。

他方、「広い意味でのデジタル思考」は、人間の情念と骨がらみになって差異≡差別といった働きも充分に行う。

デジタル思考の10において、0は、何かを欠くことによって欠性対立として定義づけられる。これは客観的な処理のように見えるが、差異の持込みという点において既に排除のメカニズムを含んでいる。

つまり、われわれはその事実に近い間目をつむろうとしてきたのだが、論理または人間の思考はそ

の根源的な部分において、スケープゴート生成のメカニズムと仕掛けを共有しているのである。そして、都合の悪いことには、日常生活のなかのデジタル思考は感情的レベルにおける排除をどんどん再生産するのである。われわれの日常生活における時間感覚は、そういう負性を帯びたイメージを再生産し、それからわれわれ自身を引き離すことによってしか活性化することにならないのだ。これがスケープゴート生成の論理的前提である。

そこで、この項のはじめの方で紹介したりオ族の事例に戻るなら、この文化は、ある意味ではデジタル思考とアナログ思考をきわめて巧みに生かした社会ということが出来る。というのは、リオ社会では〈頭〉と〈尾〉という二項対立が根源的メタファーとして使われている。この二項対立では、人間の頭／足、家の人口／奥、村の人口／出口、天／地、山／海、妻を与える集団／妻を受けとる集団といった項が対になっていて、祝祭や儀礼を通じてこの項を繋いだり離したりすることによって、社会の基本的コミュニケーションが成立している。たしかにこの二項対立は、男／女の対立を強調しないために、ジュクン族におけるほど「性差」を通しての女性排除のメカニズムとしては働かない。しかし、この社会においても村の〈内〉と〈外〉、上／下、山／海、冷／暑、善神（アナ・カロ）／邪神（ラブ・リア）といった潜在的排除を前提とした二項対立は存在する。また年一度の大祭においては、村の司祭があらゆる災厄の根源と見做される鼠と同一視され、追い廻された挙句村外へ追放されるといふ、スケープゴートそのものの儀礼が行われる。フロレーヌ島のリオ族ばかりでなく、東インドネシアの諸

島の文化において周期的または疫病の流行の際に、さまざまな形をとったスケープゴート追放の儀式が行われるのである。

リオ族の文化において、デジタル思考に基づく二項対立が「性差別」に転化することを阻止した要因の一つとして、二項対立が「母」というアナログ的イメージによって中和されているという事実を挙げ得るかもしれない。

渡辺弘氏によると、アナログ思考は「感性的・直観的思考」であり、「五感にうったえかけてくる、感覚的なものによる表現」であり、「感覚という質的なものを素材とした全体的、想像的、あるいは瞬間的」または「直観」する思考、「全体がひと目でわかる」連続的思考である（渡辺、前掲書、五三、五六、五七頁）。

リオ族において、家屋は母の胎内であり、一年に一度の大きな祭りに七人の主な司祭が胎内回帰を遂げて、宇宙再生の儀礼を行う。ここでは神話の世界で断たれて別れた天地が再びつながれて、連続的で切れ目のない世界が再現される。このようなデジタルとアナログ思考の望ましい相互作用は、排除の差別への転化を予防する要因として挙げることができる。

六 文化の詩学へ

『文化と両義性』(岩波書店)をはじめとする一連の論考において、私は、文化的秩序は周縁の觀念と対になっていることを示した。本稿においては、文化における排除の原理が、文化のアイデンティティの維持のための基本的な与件であることを明らかにしようとしてきた。文化は、排除するものと排除されるものとのひそかな相関関係によって、その活力を保ち続けてきたのである。さらに本稿において明らかにしたのは、文化の排除の論理は記号の生成の過程と分ち難く結びついているということであった。また、文化のなかの概念構造において、排除の対象となる要素はエントロピー的要素として意識の表面から追放されるが、ひそかに中心部分を構成する秩序の基礎を掘り崩し、より包括的なシステムへと文化が再統合されることを可能にする。なぜなら、それは絶えず負性を送り込むことによって秩序を構成する概念の多義的な極を補強し、弾力性を与え、秩序が動脈硬化を起すことを防げる。だから文化のなかにおける排除の問題も、排除を除去すれば問題が解決するというわけではない。もちろん、排除による被害を最小限に喰いとめる努力を継続していかなければならないのは、言うまでもない。そこにわれわれが直面する最大の難問(ディレンマ)がある。それは、例えば犯罪者がいなくなれば理想の世界が実現するのか、という問題に似た設問である。

例えば別役実『犯罪症候群』(三省堂、一九八二年)において、閉鎖的なコミュニティにおいては、ある程度周期的に継起する凶悪な犯罪が村落共同体に生氣を与えて蘇らせることを、日本の村落研究において多分これまでなかったような克明な分析によって示した。こうした犯罪は祝祭にも似て、エントロピーが蓄積されて停滞した閉鎖的な共同体を蘇らせる。

文体はスタイルという英語に対応する表現である。スタイルはふつう日本語のなかではファッションのモードとか、ちょっと氣どった表現または美術史における形式といった趣で使われている。たしかにスタイルⅡ文体にも、平均化され標準化されて模範文例化した静的な極と、動的な極という二つの極がある。ふつうよい文章という場合には、前者を指すことが多い。結合度の高い語群が安定した関係で結びつけられている読みやすい文章というのがある。こうした文章は、現実の一定のレヴェルしか反映しないから、既に組み合わさったパターンを踏襲しているに過ぎない。学問研究の文体はこうした枠にとどまるのが望ましいとされる。

これに対して悪文と言われる文体がある。すべての概念がそうであるように、悪文にも思考の混乱を反映する悪文と、きまりきった常套句では表現できない現実の層を描こうとするために、一見悪文の印象を与えるスタイルを持つ文章がある。詩の世界では前者は陳腐で通俗的な作品と呼ばれ、後者は難解な作品と呼ばれる。

前者のような詩と後者のような詩の違いはどこにあるのか。前者の詩は、語と語の結びつきに関し

て言えば、日常の言語の体系のなかで結合価の高いことばが寄せ集められる。このレヴェルでの結合価は、日常生活のなかでの個人と集団のアイデンティティを乱さない語群で形成される。この語群の形成のために「悪趣味」として排除される語群がある。こうした語群は、秩序を乱すエントロピーの高い語の集りと考えられる。ところが、こうして排除の対象となった、つまり周縁性を帯びた語群は、日常生活の用語の一元的明快さを欠く代りに、曖昧ではあるが多義的表現を可能にする媒体となる。それはちょうど畸形人が社会の中心的な空間から疎外され、見世物空間に所属しながら、身振りによるイメージの高い喚起力を保持してきた、という状況と対応するものである。

つまり、文体というのは、陳腐な透明さとどまるか、通常の視点では不可視的な現実を可視的なレヴェルに移行させるためにあえて不透明な要素をどの程度導入するか、のどちらかを選ぶことによってその振幅がきまると言える。

不透明な要素とは、諧調を旨とする文章秩序では排除される対象にほかならない。こういった要素は記号的にマイナス価を含むから、透明な文体の無徴性に対して有徴性を構成する。この不透明な要素とは、殆どエントロピーとして表現されるものに等しい。

現代ドイツの文学史家ヴォルフガング・イーザーは『行為としての読書——美的作用の理論』（饗田収訳、岩波書店）のなかで、私が不透明性と呼ぶものを「否定性」ということばで表現している。少し煩雑になるくらいが無いでもないが、イーザーの「否定性」についての考え方を再現してみよう。

イーザーの考え方をよりよく理解するためには、まずいくつかのことばを理解しておかなければならない。例えばテキストということばがある。文学的テキストと言えば文字によって構成された表現の媒体、くらいの意味で理解しておけばよろう。ただしテキストには閉じたテキストと開かれたテキストがあると考えておいた方がよろう。閉じたテキストは、どちらかと言うと可視的な現実の複写のための媒体であり、開かれたテキストは不可視の現実までを表現の射程に収めようとする媒体である。

イーザーは、動的なテキストには至るところに、テキストが「たてまえ」として主張したり表現したりするレヴェルに異議を唱える「空所」や「否定」があるとする。表面において文学テキストは、在来のコミュニケーションの手段との関係を保たなければならない。在来のコミュニケーションは閉じたテキストとして、異質の要素を排除することによって成り立っている。それは文化および社会がアイデンティティを確保するために、他者を可視的なものにした上で、これを排除して秩序を維持しようとするのに似た行為であると言える。

こうして継起する文学のテキストのなかの「空所」は、多義的な真空状態を醸成して、読み手に、己れのモデルを作り出しながら解読するきっかけを与える。想像力が介入する地点であると言える。イーザーは、こうした「空白」という障害を通じて読者は「自分の慣習や行動様式の限界を超えた違った条件のもとで、異質な世界を経験することができる」と述べる(三八八頁)。異質な世界とは、我

々が「深層の現実」と呼ぶところのものである。

こうした前提のもとに、イーザーは開かれたテキストの言語表現は、「表現されていないものによって裏うちされている」と述べる。彼によれば、「テキストのこの重層性(われわれの不透明性)は、不定性と呼べよう」。「否定性」とは「むしろ語られていないことを、空所および否定を軸として展開し、テキストの表現(語られていること)を構成する基盤を作り出す」ものである。

イーザーが文学理論の枠組のなかで示したことは、ほぼ文化の理論のなかにおいても妥当性を帯びていることができる。

われわれがスケープゴートという文化装置のなかに見たものは、それが文化のなかの吸収・綜合と排除のメカニズムを通して「否定性」の素材を再生産するという事実であった。この「否定性」は文化のなかの負働を帯びている記号に相当する。それは語であったり、イメージであったり、範疇(カテゴリー)であったりする。多分この「否定性」は、ルネ・ジラールが静的な構造論を越えるために導入することを提唱する次のような範疇でもあるのだ。

構造主義の諸限界を超えるためには、たとえば双生児、病氣、あらゆる形の伝染病や感染症、説明し難い意味の転倒、予想もしない生長や収縮、こぶや変形、怪物、あらゆる形の奇形なるものを、過度であると同時に不十分に意味するさまざまな、疑わしい意味作用に力点を置かなければならない。(古田幸男訳『暴力と聖なるもの』法政大学出版局、三九一頁)

私個人は『道化の民俗学』（新潮社）をはじめとする道化・トリックスターおよび王権の研究において、文化のなかの挑発的な部分、挑発的であるが故にスケープゴート化されやすいが、そこから動的な像（イメージ）が生まれることを追究してきた。スケープゴートの詩学とは、こうした動的な部分を総称する文化の詩学と名づけられるにふさわしい領野であろうと思われる。

〔追記〕 本小論脱稿の五日前、一九八二年十二月十五日に、私が人類学に参入（イニシエート）することを可能にして下さった岡正雄先生の計報に接し、脱稿前日に先生の御霊をお送り申し上げる機会に接した。先生の学恩を謝するとともに、この拙き小論を「異人その他」をはじめとする諸論考や座談で限りなく私達を啓発して下さいました先生の御霊に捧げたい。

なお小論は一九八三年六月パリでルネ・ジラルド氏を中心に開かれる「スケープゴートについての国際シンポジウム」のための第一稿である。